

人工鱗型潮溜と沿岸景観設計

正会員 三浦 行政

1. まえがき

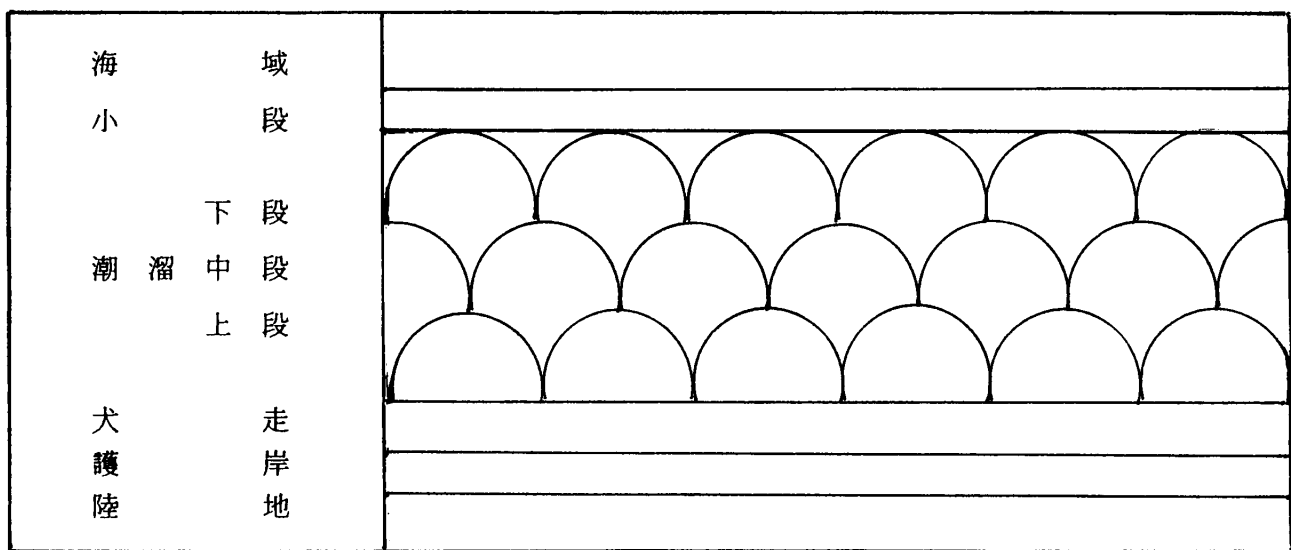
磯の生物を護岸工事から保護することで、自然との両立を図り、景観の再現と環境を回復させ、波の抵抗を少なくすることを考慮した魚の鱗にかたどった人工の潮溜を護岸添えに設けて代替施策を講ずる。沿岸の埋立工事に際しては、元の景観や周辺の環境に配慮し瑕疵を減らす配置とした。

2. 護岸、人工鱗型潮溜

(1) 表面の形状

人工潮溜の平面形として鱗状の三段階にしたものを（図一1）に示す。

図一1

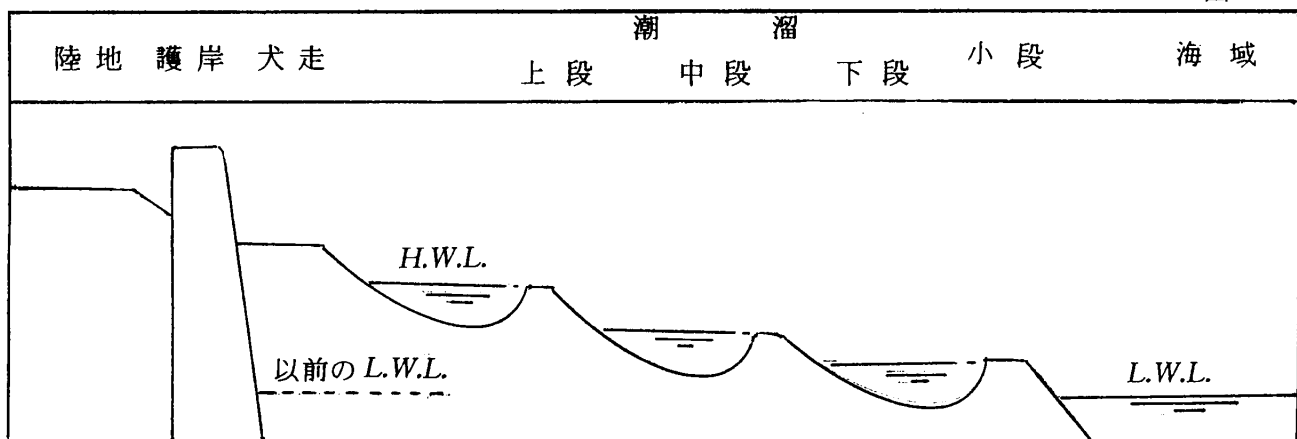


鱗状の表面は粗仕上げとし、先端部分にあふれ溝を設け、深さはその海域の最高波の1/5程度とし、大きさは深さの10倍程度にする。

(2) 断面の形状

人工潮溜の断面形として波形紋を三段階にしたものを（図一2）に示す。

図一2



沿岸環境

〒273-0863 船橋市夏見6-7-15 TEL 047-423-1639

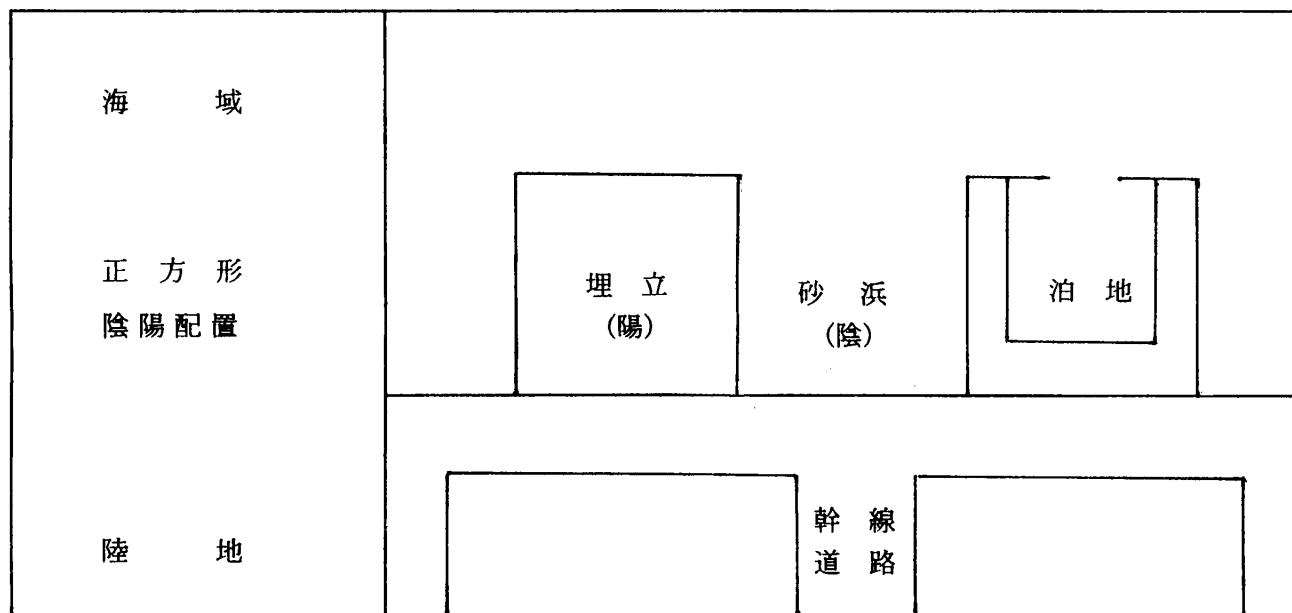
3. 埋立、沿岸景観設計

(1) 正方形の陰陽配置

沿岸の埋め立ては可能な範囲で砂浜を確保し、内陸からの取付け幹線道路は砂浜の中央部に向けて位置し、泊地は埋立地の内に置く。屋外の区画された中での理想的な平面空間は正方形が望ましい。沿岸域に限らず、小さいのは中庭から公園や駅前広場に至るまで、それぞれの場所において、行動するのに前後左右の無駄がなく、視界距離の差も少なく、余分な負担が掛らない経済的な空間といえる。

自然の海岸線は砂場（陰）と岩場（陽）の交互の配列をなし、自然環境の均衡が保たれていて、これに似た景観を取り入れた配置を（図—3）で示す。

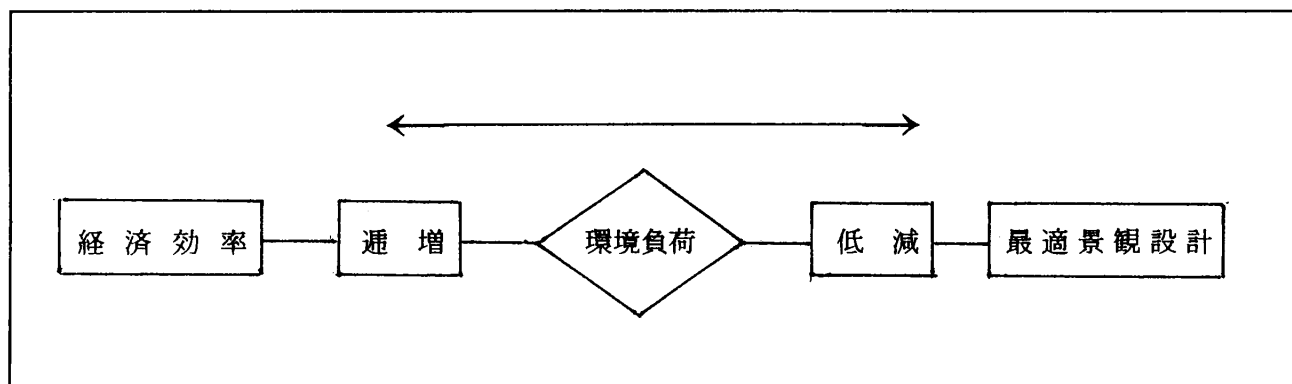
図—3



(2) 環境負荷の遞増低減

経済発達を続ける都市の沿岸域にあつては、経済効率と共に遞増する環境負荷を低減させるには、その場所に最も適合した形で表現ができる最適景観設計を導入する。環境と景観は互いに寄与し合い経済と関わりをもつ（図—4 参照）。

図—4



4. 結 論

屋根の化粧に鱗瓦があり鱗状の潮溜と意匠面で共通するところがある。海辺は周囲が開かれていて、人工施設は整った形のもの、景観と取り組むときは配置を考慮するといった感覚評価は、地域変動に伴う景観構成要素といえる。